

現代俳句 やまこち

第 87 号



青海島（長門市）

山口県現代俳句協会

第41回中国地区現代俳句大会（紙上）のご案内

現代俳句協会中国地区連絡協議会 会長 川 崎 益太郎
山口県現代俳句協会 会長 久 行 保 徳

- ◆趣 旨……広く中国五県の俳句愛好者より作品を募集し、その優秀作品を顕彰し、俳句文学の発展振興をはかる。（コロナ禍のため、今回は紙上大会といたします。）
- ◆と き……令和5年6月11日（日）
- ◆投 句……募集句（未発表）2句（1口）、
投句料1口1000円（定額小為替等を投句に同封）
※できるだけ2口以上の投句をお願いします。
〈会員以外の投句歓迎〉
- ◆選 者……各県現代俳句協会会長、副会長、事務局長並びに中国地区連絡協議会顧問に依頼する。
- ◆表 彰……中国地区現代俳句大会賞・毎日新聞社賞・周南市長賞・中国地区連絡協議会賞・優秀賞・秀逸賞（高点順、1人1賞）
- ◆投句締切……令和5年3月31日（金）必着
- ◆送 付 先……〒745-0882 山口県周南市一ノ井手5457
藤井康文方

中国地区現代俳句大会事務局
TEL&FAX 0834-21-3778

令和5年度 山口県現代俳句大会について

毎年実施している「山口県現代俳句大会」は、中国地区大会の山口県引受けの年は「中国地区現代俳句大会」と併せて実施しています。故に本年度の単独での大会はありませんので上記大会に奮ってのご応募をお願い申し上げます。

第87号目次

第四十一回中国地区現代俳句大会作品募集要項	
令和四年度第3回理事会報告	1
次代に繋ぐために	河村 正浩 2
第八十六号 作品鑑賞①	野村みどり 4
第八十六号 作品鑑賞②	上石久美子 6
会員作品	8
山口県現代俳句協会勉強会	平川扶久美 15
作品募集・支援基金	16
告知板	

表紙「青海島（長門市）」

令和4年度第3回理事会報告

日時 令和4年12月4日（日） 13時30分～
場所 山口市「小郡ふれあいセンター」
議案

- ① 第31回山口県現代俳句勉強会の報告
- ② 第32回山口県現代俳句勉強会の実施について
令和5年4月の理事会において決定する。
- ③ 第27回山口県現代俳句賞の実施について
- ④ 第33回山口県現代俳句大会の実施について
- ⑤ 令和5年度山口県現代俳句協会総会について
- ⑥ 令和5年第41回中国地区現代俳句大会について
- ⑦ その他

（報告者・事務局長 平川扶久美）

次代に繋ぐために

副会長 河村 正浩

山口県現代俳句協会は、平成三年に百五十八名で発足し、一時期は二百五十余名の会員を擁した。しかし今や七十余名となった。また、山口県俳句大会を見ても、その実応募者数はピーク時の三分の一を切るに至った。

山口県文化連盟に講師派遣制度があり現在七名が登録。一カ所へ年間五回派遣する。謝礼なしであるが、県文化連盟から二千元（交通費）が支給される。令和三年度は中学校二校へ派遣。個人的には時々小学校から声がかかるが、やはり授業としての一環であるが、種蒔きにはほど遠い。一部の高校を除いて、クラブ活動は他に見当たらない。

中高校のクラブ活動を見渡すと圧倒的に体育部であり、文化部で多いのは吹奏楽部、続いて書道部、放送部だろうか。これもほとんどが女生徒。

現在、高等学校では、俳句甲子園のほかに、山口県高等学校文芸コンクールがある。俳句は最優秀一名、優秀・

優良各二名、入選三〜四名であり、二年生以下の上位者は全国や中国大会へ出場する。これを利用しない手はないとして考える。高校への働きかけはもとより、中学生・高校生に如何に俳句に興味を持たすことができるか、環境を整える必要がある。

そうした中で今、公立中学校における文化体育部の地域移行に関する検討会が始まった。文化部について、文化庁において検討会議が七回行われ、八月にまとめられた。それを受けて九月二日に、山口県庁において、その説明会と意見交換が行われた。

課題

- ・ 中学校生徒数の減少が加速。深刻な少子化が進行。
- ・ 休日を含めた部活動の指導が求められ、教師にとつて大きな業務負担。
- ・ 地域では、文化芸術団体や指導者と学校との連携・協働が十分でない。

目指す姿

- ・ 少子化の中でも、将来にわたり我が国の子供達が文化芸術に継続して親しむことができる機会を確保。それは学校の働き方改革を推進し、学校教育の質も向上。
- ・ 地域移行を契機に生徒や保護者等が地域の文化芸術活動に参加し、地域における文化芸術の発展を主体的に

形成。更には地域社会を豊かにすることにつながる。

- ・地域の持続可能で多様な文化芸術等に親しむ環境を一体的に整備し、子供達に多様な体験機会を確保（文化芸術団体の組織化・指導者や施設の確保など）

改革の方向性

- ・先ずは、休日の文化部活動から段階的に地域移行していくことを基本とする。

目標時期 令和七年度末

改革集中期間 令和五年度～七年度

- ・その際、平日についても視野に入れ、休日の文化部活動の地域移行と共にできるところから取り組むことが考えられ、地域の実情に応じた休日に関する地域移行の取組の進捗状況を検証し、更なる改革を推進すべきと考える。

- ・地方公共団体（県や市町）における推進計画の策定・実施

構築方法等

場所 学校施設、地域の社会教育施設、文化施設等

方法 市町村において、地域文化振興担当部署や学校の

設置・管理運営を担う担当部署、地域文化芸術団体、学校の関係者からなる協議会を設置し、活動の実施主体やスケジュールなどを検討し実行。

令和五年度

- ・既存の文化芸術団体・組織の活用を始めるなど、地域の実情に適した取組開始

・各市町村において、次年度以降の新たな環境構築に向けて必要な経費や人員等を検討・措置

- ・指導を希望する教師が円滑に兼職兼業の許可を得て地域で指導できるよう運用開始

・全国中学校文化連盟等は、参加資格の緩和等を行う
た大会を開催

概要は以上の通りである。これはあくまで中学校の文化部の活動の地域移行であるが、中学校の文化部は吹奏楽を除いては余り聞かれない。しかし、これから各市町村において、教育委員会（地域文化振興担当部署）のリードにより文化協会や芸術文化団体の会合が持たれるはずである。「将来にわたり、わが国の子どもたちが文化芸術に継続して親しむことができる機会を確保」のテーマを機に、我々の句会に、中学生を参加させるのである。或いは俳句サークルを作り、俳句の楽しさを教えるのである。私たちは俳句を楽しむだけでなく、如何に後世に繋いでゆくかである。先ずは中学生をターゲットにすることで、小学生への種蒔きも生きてくるであろうし、高等学校の俳句の未来も明るくなる。そして県俳壇も。

作品鑑賞（第八十六号）

野村みどり

天空の棚田に春の風座る

石川 芳己

県下で天空の棚田と云えば祝島の平さんの棚田をモチーフに詠まれたのだろう。島の稜線を小一時間歩いて辿り着く。そこには春の優しい風が座っている。

白靴に透き間が少し砂時計

市川 邦子

大好きな下したての白靴の透き間を少しづつ満たす砂。これを砂時計に転化させて、有無を云はせず刻む時計。目を移せば早くも夏の到来である。

白れんの万燈のごと風の谷

井原三都子

十数年前の事だが萩の東光寺での送り火を思い出す。昼なお暗き風の谷では、万燈は正に送り火。一輪一輪がかけがえの無い霊送りで、つい手を合わせてしまう。

草萌えて缶蹴られ音寂し

上石久美子

草萌えの息吹の中、無聊をかこつか、缶を蹴る。今の子は缶蹴りをしないのかしら。缶そのものも転がってはいない。その缶の音に己れを擬人化した。

風待ちの宿の日溜り孕猫

上重 石峰

瀬戸内海には、嘗て朝鮮通信吏との交易で栄えた島々が残る。その一つに大崎島もあるのだが、正にその景がみえてくる。孕猫ののっそり歩く長閑な島の一齣だ。

三月の山三月の川飽きず

上野 昭子

モチーフは、飯田龍太の「二月の川一月の谷の中」で、作者の眼目は、三月。三月の山は喜びを隠し切れないその三月の川を飽きず眺める作者がいる。

東北に花を零して地震の這ふ

上原 祥子

三・一一から月日の経つのは早いもの。あれから余震も含めて日本列島では、地震続き。花は零れつばなしで、地震大国の汚名、いやが上にも認識させられる。

しばらくは地軸にギブス山眠る

岡田 薫

地軸にギブスの表現が愉快だ。雪がぐつきりとぶ厚く残っている様だ。それもなかなか溶けず、しばらくは……日本では自馬連峰の大雪渓が有名だがこちらは夏。

ラグビーや魔法の薬缶はどこ行った

尾倉 雅人

懐かしの大薬缶。本当に何処へ行ってしまったのかしら。陸上部の部活には必要アイテムでした。最近は、それぞれに持参するのか、これもコロナ禍の一つかも知れぬ。

しっぽ持つものの集まる月夜かな

片山 淳子

思わずメルヘンの世界へ誘われ、尾底骨が疼きははじめ

ます。それもその筈秋草の零れる月影のもと、しつぱ持つものの饗宴が始まります。あなたのしつぱは今、何処へ。

溜色の艶しつとりと牡丹の芽

河村加南子

溜色の艶の表現に脱帽です。これ以上の表現は無いと感じ入ります。芽といえど花の王者に相応しい風格です。流石、自然の奥深い妙に心奪われる作品です。

逆さまに蜘蛛はこの世を見てをりぬ

河村 正浩

芥川龍之介の「蜘蛛の糸」を思い起こした。チャランポランな今の世は逆さにみるのが丁度いいのかも知れぬ。蜘蛛の目線で作者はこの世を譴責しているに違いない。

桜散るまさかのまさかダイビング

木村 幸子

お母様を亡くされた思いが、「まさかのまさか」に色濃く凝集されて伺え、思わぬ展開に驚ろきを隠せぬ作者。きつとお母様は、桜と共に逝きたかったのでしょう。合掌。

冬銀河詫びても足らぬことばかり

河内山裕見

冬銀河の措辞が効果的です。何億光年も離れている星の光は剣のように冷たくこの身に迫ります。言の葉をいくら重ねても心収まらぬこと、言葉の限界を感じます。

赤き実へ赤きものへと寒夕焼

河野 悦子

寒夕焼を存分に楽しんでる作者の視線の移ろいは、赤い実から赤いものへと拡がって行く。そして心の情熱

の赤へと。今日一日の充足感溢れる佳句となった。

木の葉降る喪中葉書を風にして

清木たかし

今年は異常気象の所為だろうか。確かに喪中葉書が数多く。その度に友人の身辺を伺い、寂しい思いに浸る。自分自身がまるで木の葉のように。

さえざりや千本鳥居ひた登る

田中 和子

さえざりの季語に漲るエネルギーを感じる。千本鳥居をひた登る作者は、まだ若い。豊浦の千本鳥居参道辺りの景でしょうか。爽快な気分も伺えます。

山寺の鰐口一打夏に入る

竹本チエ子

静寂の山寺に夏の訪れだ。しかも鰐口一打にして。めり張りの効いたリズム感で一句が仕上がった。心地良い一打である。禅寺での有難い法話をいただき帰路に着く。

花蘇芳咲いて父の忌荷風の忌

橘 美泉

花蘇芳の赤紫の花が好きで堪らない。お父様の忌日でもある荷風の忌。荷風は江戸の下町をこよなく愛し、日毎散歩した。勿論下駄履で。この作家魂は見習い度い。

万愚節友は優しい嘘をつく

千々和美佐子

万愚節、こんな日は、優しい嘘どころか大嘘のつき放題で世をワツと沸かせ、一笑させたい気分。一年に一度の大攪乱の日だ。とは云え性に合わないのか、皆大人しい。

作品鑑賞 (第八十六号)

上石久美子

口笛を五月の風に乗せて行く 中田 裕子

机に座って知っている曲を吹いてみた。自分では上手く吹けたと思っただが、誰かに聞かせるほどではない。五月に吹いて歩けば、すれ違った人は暫く耳から曲が離れない恐怖を味わいそうだ。爽やかな五月の風に、口笛が思い通りに乗ってくれることを願って止まない。

紙雛の眼のない顔の視線かな 西村 玲子

段飾りの雛が買えなくて、雛の絵を描いた掛軸を買ってもらったのを思い出す。床の間の細面の顔には、優しい眼があった。今思えば母親の眼に似ていたような記憶がある。

はんなりと言の葉返す藤の花 野村みどり

ぶら下がっているだけで、上品な明るさを放つ藤の花。誰かに似ているが、思い出せないもどかしさがある。最近白藤も良く見かけるが、藤の花はやっぱり藤色だろうと私は断言したい。中七に感性が感じられる一句。

縮んだところに大きな海を見せに行く 久光 良一

遣る瀬無い思いを晴らす方法がない時、友人と近くの海に行く。二人で「海は良いねえ」を繰り返して笑う。正に「心に海を見せる」のだ。瀬戸内の海が近くて有り難い。笑うっていいね、笑いながら引き返す二人を海は見ている。

棚田まで九十九折行くねぶの花 久行 保徳

島根県柿ノ木村の近くに大きな棚田が存在する。展望

台から見渡せば、農家の方々の御苦労が見える。花合歓に見下ろされながら立ち尽くす喜び。雪の季節にまた来たいと思いつつも帰るが、いつのまにか春が来てしまう。

桐一葉天使の羽根は生え変わる 平川扶久美

私は「変わる」ことに憧れる。明眸皓齒に憧れている。悩みの歯が生え変わっているかもと、朝の鏡の前で見ても変化は無い。口中の歯が綺麗に生え変わっている朝が欲しいと願っているが、もう無理。

新築の庭に小振りな鯉職 藤井 邦子

本当は大きな真鯉・緋鯉を元気に泳がせたい親心が見える。周囲に気兼ねして、今回は小振りにしようかと思う日本人の情感が伝わる。中七の情景を見た作者が捉えた感覚が優しくて素晴らしい。

終活のアルバム重し時雨けり 藤井サカエ

集まれば「終活」の二文字が会話に跳ねる年齢になった。私のアルバムが仕舞ってある天井近くの戸袋のことを、先日子供に告げた。あれは捨てても良いからね。返事が無かったのが私の心の中の「時雨」だった。

古民家に二体の小芥子芥え返る 藤井八重子

昔は何処の家にも「こけし」の一体二体はあった。旅行のお土産は「こけし」だった。現在、修学旅行のお土産は何だろう。小さな「東京タワー」をもらった記憶がある。あれは何処へ行ったか？旅に行きたいと私の心が激しく募る。

機関車のような貌して野火走る 藤井 康文

野焼きの情景をテレビで観ると「走る」が良くわかる。近くで見守る人は怖くないのかと心配になる。正に「機関車」がびったりだ。野火をユーモラスに存在させた客

観写生。作者が野火に驚いている面白さがある。

姿勢よき葱坊主には凝りのなし

堀口 孝子

昔から姿勢が悪いよって言われてきたから、硝子戸に映る自分の姿を見るのが嫌である。姿勢がスツキリ美しい人を見るのが嫌いである。姿勢の良い葱には嫉妬する。肩凝りが無いのかと知って、再度の嫉妬を覚えていた。

しゃぼん玉ここからは誰の空でもない 堀 節善

読む人のところを捉えて幻想の世界へと誘う。作者の意図は別なかも知れないが、私なりにその世界へ浸ることが出来て嬉しくなった。しゃぼん玉の自由。詩情が飛んでいる。

梯梧咲くいまが平和か問うている

植田 敦子

真っ赤な蝶形の花を開いて、青空に目立つ梯梧の花。スケールの大きい句であるし、作者の存在感がしっかりある。不思議な次元に誘われる。夏の笠戸島へ梯梧の花を見に行きたいと霜月の今思っている。

風を切る少女の項夏立てり

松原 君代

この時期に「夏立つ」を読んで何故かほっとしている自分がいる。朝早い時間、自転車飛ばす女子高生と出会う。スカートが捲れていると「大丈夫？」と心配になる。日常生活から素材を見つけ出した作者の目を感じる。

緋牡丹に気をとりなおし今日が終る

松本 清水

隣の庭には毎年緋牡丹が咲く。我家には無いから「咲いたよ」とお声が掛かるので、いそいそと見に行くのが恒例になっている。我家には牡丹が根付かない。何故か牡丹が私に気兼ねしているらしい。座五の素直さが効いている。

誕生日お洒落なマスク届きおり

森口 育美

この三年間、日常生活でマスクを付けることが当たり前

になっている。服装に合わせた色をマスクにする。素直で丁寧な表現であるから、分かりよい句であり、幸せな作者の誕生日を祝って、一緒にハッピーバースデーを歌いたいと思う。

春遠し戦禍の街の駅ピアノ

保田 尚子

NHKのBSテレビで駅ピアノを良く見聞きしている。行ったことのない国の空港ロビーや大きな駅にあるピアノ。通りすがりの人がプロ奏者のように上手くピアノと溶け合って弾いていて驚く。作者の人間性がうかがわれ、季語が効果的に胸に迫ってくる。

青梅の一夜は風の試練かな

安永 一孝

五、六月に急速に育つ梅の実。青梅をビール煮にして保存する。甘酸っぱい香りがいつまでも冷蔵庫で眠るのだ。梅の実には風に弱い。風の一夜が明けると、ポロポロ落ちていくが、落ちた青梅には爽快さが詰まっているのだ。魂に穴のあるらし枯野ゆく

魂に穴のあるらし枯野ゆく

山口 智子

「魂」は動物の肉体に宿って、心の働きをつかさどると考えられるものであり、古来多く肉体を離れても存在するとされた。作者の心に空いた穴は何だったのだろうか。読み手は想像してしまう。精神・気力、どれも日々の暮らしの成り立ちに大切なもの。穴が塞がって枯野を駆け廻っている作者と出会いたい。

新緑の山ふくらみて新幹線

山下 悦子

我家の裏の近くを山陽新幹線が走っている。九州への直行便が出来てからは、以前より新幹線の往来が激しくなった。リビングのガラス戸がビリビリと鳴る。新緑に膨らんだ山の中を格好良く走る新幹線。修学旅行のお土産として、誰かに貰った小さな「新幹線」の文鎮で資料を押さえて、四苦八苦しながらこれを書いている。

会
員
作
品

なめくぢり

井原 三都子

(光)

なめくぢり背負うたものを捨てて来し
はぢらひの誘うてゐるや花仙人掌
階段をひとつ上がれば沙羅の花
実南天黄昏さそふ猫の反り
冬うらら潮遡る魚影つれ

風の盆

石川 芳己

(周南)

干柿の匂いなつかし里の軒
村中が弾み声なる秋祭
秋風や母とハミングみすゞの詩
夜汽車待つ君の項に星月夜
風の盆無心にひと夜踊りけり

山眠る

上石 久美子

(下松)

確かには書けぬ文字増え山眠る
侘助と呼捨てられし花無口
メモ書の重なる机上二月迷ぐ
茶柱の揺れて三月立ち上がる
霾や日に幾度も手を濡らし

合歡の花

伊藤 惠美子

(周南)

卯波立つ例えば真砂女の痛みとも
少女の眼溢れて秋の水となる
空截つて鳶群れ渡る小六月
はにかみは幽けき反旗合歡の花
鼻濁音美しき人ふと春キャベツ

埴輪

上重 石峰

(岩国)

父母のアルバム薄し豆の飯
無口とは幸の極みよ山椒魚
明易し卵の臍に遊ばれて
埴輪には戦の匂い罌雲
色葉散る友はゆるりと空昇る

回想

上野 昭子

(光)

命日のつるりと剥けし芋名月
自肅待機九月の仏会いに来る
花野から花野へ夫の柩抱く
蜻蛉の格好よき日夫危篤
十六夜の森動き出す夫の死期

牡丹

河村 加南子

(周南)

故郷の古地図の絵皿花菜漬
牡丹色を究め牡丹の三分咲
きっぱりと備前の壺に鉄線花
白南風や音やわらかき鹿威し
虫籠を食み出しそうな鬼蜻蛉

秋の風

岡田 薫

(光)

神様の怒りでしようか春の雷
離婚しました菜の花わんさ咲きました
突堤の蝶は彼の世へ秋の風
双眸に天地の境鷹渡る
さっそうと死んでゆくのか流星

枯蓮

河村 正浩

(下松)

素つ気なき惚けをかまして馬肥ゆる
赤とんぼ天地神明もて余す
小春日の到る所に木触れる木
帰り花真つ赤須佐之男かも知れず
土に還る夢を見てゐる枯蓮

黄落期

片山 淳子

(柳井)

針目縫目揃わぬ沖繩慰霊の日
初生りの茄子一本如何にせん
余りたる墨で一文字涼と書く
周平の本積む嵩や黄落期
父の忌につづく母の忌冬落暉

秋の虹

木村 幸子

(宇部)

秋の虹夫は施設で幸せか
冬紅葉一人庭にて皆既食
秋彼岸売家あちこち墓地荒れて
十三夜心洗われはずむ帰路
金秋や修理し屋根にヒヨの鳴く

水の秋

病むいのち掠めてひとつ流れ星
あまた鳴くこゑに紛れず法師蟬
円き橋円く映して水の秋
七五三足袋の鞋にてこずつて
千歳飴抱いて一段また一段

木村 たけま

(周南)

鶴

朝焼の鶴を私ししていたり
裸木をたてかけダダの空となる
青き柚子絞る亡母との想い出に
いわし雲雑念ながく林住期
自画像の裏側すでに銀河濃し

諏訪 洋子

(宇部)

見晴るかす

青春の高ヒール靴秋日濃し
見晴るかす家の人押し秋の声
一人居の過去へ堕ちゆく長き夜
感謝する記憶の記録涼新た
AIの交換手役肌寒し

河内山 裕 見

(宇部)

夏座敷

貨物船のぬつと顔出す夏座敷
曇天へ槍の穂先の花菖蒲
蛍来て女の耳朶を浮かばせる
来客の絶えて提灯だけの盆
理髪店に睡魔貌出す秋暑かな

せいき たかし

(下松)

十三夜

守宮てふ良き名に免じ棲まはせる
どこに置きても傾ぐ八月の椅子
ドロップスに甘さ酸っぱさ敗戦忌
木犀やまだ抜け道を知らぬ町
ミュージカル満席今宵十三夜

河野 悦子

(山口)

星月夜

浜木綿はひそひそ話す^{おうな}嫗たち
おしゃぶりの落とし物や金木犀
しじま裂く緊急速報星月夜
秋の旅古稀の友の声は乙女
文化の日バルーンフェスタ犬駆ける

田中和子

(宇部)

武將墓地

竹本 チエ子

(光)

石路の花宗春主従十一基
水攻めの舟上で舞う宗春や
忘れし歴史をここに石路咲いて
石路の花日陰の墓に似合う花
木の実おち墓地のしじまを破りたる

落葉

千々和 美佐子

(下松)

水害の彼地の梨の重たさよ
蜂の巣を焼いて勝負をしたりけり
それぞれに色の円陣落葉かな
木犀の香に包まれて五六日
隧道へ银杏紅葉の極まれり

油 蟬

橘 美泉

(下松)

白牡丹一会の白を極めけり
三号のドックの巨船夏燕
油蟬鳴き止んで空軽くなる
父の日の米の水嵩手で測る
虹立ちてつかめぬものはみな美しき

秋日和

中田 裕子

(下松)

暮れ際の流れを急ぐ秋の水
おだやかに暮ゆく峡の冬至かな
耕運機の音の転がる秋日和
真青なる空にウイंकする通草
狛犬の耳立てており冬紅葉

秋 風

田村 美和子

(下松)

強弱のリズムはサンバ戻り梅雨
結界は一里四方の夏木立
あの頃の母は笑顔で草むしり
いつの間に風の優しき今朝の秋
秋風に家の四方を明け放つ

墓 標

中塚 紀代子

(宇部)

横書を縦に訳してさくら散る
緑さす雨の中ではみな若い
自然は逆上しているたぶん恋してる
秋の風旅はまぶたに触れてくる
水仙に大きすぎたる墓標かな

吊し柿

西村玲子

(下松)

水面の空に浮きたる水馬
鳳仙花女の手なる小畑あり
サンルーフ紅葉四五枚貼り付いて
鶴来る蒔設う村の人
陽をさがし行き当りたる吊し柿

菊月

久行保徳

(周南)

人間の端に仙蓼たわわにす
産土の三田尻歩く耕畝の忌
菊月の夜のしじまに落ち着かず
十月は薄紅という日昏れ
爺の引く抽斗きしむ暮の秋

炙花

野村みどり

(周南)

のほゝんと生きて七十路炙花
紫蘇揉んでいつしか母の仕草なり
ひよつとこに声かけられし夜店かな
どう忘れ多き一日をチンチロリン
黒白の間を生きて文化の日

卵抱く

平川扶久美

(下関)

初蝶来旅の絵葉書来るように
燕来るアトムのを曳いてくる
泰山木迦陵頻伽の卵抱く
続柄は長女青野に父を呼ぶ
マフラーを巻いてあげようはぐれ鳥

線香花火

久光良一

(田布施)

のんびり寝て起きて孤独という自由
さびしい女の朝の素顔を見てしまう
酷暑など感じない地藏さんのすまし顔
達者にくらし忘れてられている
線香花火が最後に明るくした何か

長き夜

藤井邦子

(下松)

文化の日活気付けらる生演奏
秋曉や不意に鳴き出す鴉かな
背高の紫苑勝手に揺れており
とろとろに甘く煮詰まる南瓜かな
長き夜や解けぬパズルに挑みおり

山寺

藤井サカエ

(下松)

梅雨寒や遺品整理の嵩を積む
山寺はカナカナまでも声明師
朝焼の赫赫戦絶え間なし
名月やいまもうさがもちをつく
一朝にして実南天鳥の咎

落葉

藤兼雅幸

(周南)

難読の駅に降りれば猫じやらし
秋声を泡立てている茶筌かな
欠け椀に値付け骨董屋の秋思
独り居の罪を咎めて蚯蚓鳴く
一步二歩来し方を踏む濡れ落葉

万緑

藤井八重子

(下松)

落人の村はまほろば日脚伸ぶ
万緑の中や愉快な考がある
広島へ小さくたたむ黒日傘
妣訪うは風と逢うこと秋桜
縁側に丸き陽だまり通草の実

寒露

堀口孝子

(周南)

凹ぼと欠く根岸の机秋の声
足場組む鳶のかけ声罌雲
秋耕の老に付き来る小鳥どち
父ははと薄き縁や金木犀
独りごとと言ひつ爪切る寒露かな

滝しぶく

藤井康文

(周南)

田草取る夫婦で棚田泳ぎつつ
一山の霊を鎮めて滝しぶく
蝌蚪の尾の取れてふるさと捨ててゆく
枇杷の種飛ばし清淡はずむかな
蛇穴に入る修羅界に見切つけ

竹を伐る

堀節誉

(宇部)

カッターの刃出しっぱなしの麦秋
あなたを捜しているときの夕菅
ふつくらと老いる無花果の甘さ
倒れつつきつねのかみそり声上げる
決心の鈍らぬように竹を伐る

水の記憶

横田敦子

(長門)

秋天に水の記憶をうらがえず
天の川わたしを叱る水ばかり
望の夜の結界飛び越え水と居る
あなたへと湧水そそぎ年新た
歳時記の宇宙へひと筋雪解川

狂想曲

保田尚子

(下関)

ぼうたんの崩るる時の狂想曲
背伸びして明日を探ぐる立葵
前向きは時に疲れる蝸牛
ソーダ水泡の弾く小さき嘘
白百合の白より滲む記帳台

冬夕焼け

松本清水

(長門)

あのとくに戻り花野を駆けている
節のない柱に凭れいて秋思
冬夕焼け判官びいきの血が滾る
錦繡に命余れば夢想する
冬北斗見上げるたびに歳が寄る

冬帽子

安永一孝

(山口)

小鳥来るひとりの昼餉窓を向き
秋の雲急げば曲る海岸線
月食に聴く波の音そそる寒
真実は正座にありて石露の花
冬帽子甲斐無き拳持て余す

有精卵

三野公子

(下松)

炎昼の影の動かぬ重さかな
シヨベルカーざくと残暑の土つかむ
秋天に有精卵を透かし見る
穂芒の波立つ揺れを風が漕ぐ
紅葉かつ散るや断捨離始めたり

秋刀魚

山縣愁平

(山口)

夢などは語らず焦げた秋刀魚食う
海を見ず風見ず秋刀魚食いちぎる
ははの脂ちちの脂よ秋刀魚焼く
鴉いて鳩いて秋刀魚焦がしおり
暮らしからはみ出す秋刀魚の尾と頭

山口県現代俳句協会勉強会

平川 扶久美

令和四年十月十二日（水）、山口市の山口県教育会館にて「第三十一回山口県現代俳句協会勉強会」を開催しました。

山口県立美術館で開催中の『雪舟と室町文化 I 將軍家の襖絵 II 雪舟と狩野派』を鑑賞し、俳句を詠むという趣旨の勉強会です。

照明を落とした館内での鑑賞は、室町の息使いが間近に聴こえてくるかのように、俳句の創作意欲が刺激され、あっという間に時間は過ぎていきました。

十三時からの勉強会は、忌憚のない意見や率直な感想が述べられ、有意義で充実した時間となりました。

美術館界限はパークロードと呼ばれており、日本の道百選にも選ばれています。並木道の秋の気配と共に、文化の香りを感じながらの一日となりました。

この勉強会は、会員の方以外の参加も歓迎しております。身近にご関心のある方がいらっしゃいましたら、ぜひ

ひお誘い合わせの上ご参加下さいませ。

当日作品

（参加者十六名）

襖絵に水の音聞く秋ひと日 木戸 明子

雪舟の四季図に踊る豊の秋 堀口 孝子

秋惜しむ雪舟を見て裸婦を見て 藤井 康文

水墨画なれど湧き立つ秋の色 福田 美治

鶏頭の種がこぼれる山水図 堀 節普

香月展出て大玻璃の秋の天 木村しづを

秋風に濃淡かすれ雪舟展 平川扶久美

雪舟の系譜に鴉容れておく 山縣 愁平

雪舟図秋の七草加えたし 中塚紀代子

室町の氣息雪舟展の秋 久行 保徳

山水図の霧のながれを写す水 安永 一孝

山水の四季に十月どんと晴 河村 正浩

雪舟の宇宙に蟻螂こちら向く 榎田 敦子

雪舟の四季山水図水の秋 木村たけま

室町の色の確かさ紅葉映ゆ 藤井サカエ

鯖雲や男ふたりの太鼓橋 上重 石峰

作品募集(第八十八号)

☆ 山口県現代俳協会会員・準会員
雑詠五句

☆ 締切日 令和五年五月末日

☆ 多くの皆様のふるつての御参加を
お願い申し上げます。

☆ 送付先

〒七五一〇八六三

下関市伊倉本町十四―三

平川扶久美 方

山口県現代俳協会事務局

TEL&FAX 〇八三(二五四)三七三二

令和4年度 山口県現代俳句協会基金状況(2)

(敬称略)

氏名	口数	地区	氏名	口数	地区
上野昭子	1	光	千住紀子	1	山口
尾倉雅人	2	下関	槌崎道	4	大島
中塚紀代子	2	宇部	西村玲子	1	下松
久光良一	2	熊毛	匿名希望	2	山口

(1口1,000円) 令和4年7月16日～12月10日現在

☆払込取扱票が挿入されている方は令和4年度会費1,000円お願いします。

併せて募金ご寄付いただければ幸甚に存じます。

第五十九回現代俳句全国大会

鑑賞 福本 弘明

朝日新聞社賞

卒業の以下同文を生きてゐる

山口県山口市 田村 葉

卒業証書の授与は一人ずつ手渡され、普通は二人目から「以下同文」で済まされる。「以下同文」は、形式的な慣例として捉えられるであろうし、それ以上のもでもないと思われるが、この作品では大きな意味を持たせている。学生時代を同じ校舎で過ごした同窓生と、今も当時のような心の繋がりを持っているのだから。それぞれ違った人生を歩んできたけれど、同じ時代を生きてきた仲間であり、連帯感に変わりはなく、「ゐる」が力強い。

読売新聞社賞

手を置けば石語り出す広島忌

山口県周南市 伊藤惠美子

この石は慰霊碑の類ではなく、戦前から残る石造りの建造物の一部などではないかと想像する。それらは戦争を知る石であり、被爆した石である。普段は冷たく固い石にもきつと記憶があると感じた作者は、手を触れることよって石の思いを聞きとつたのである。悲しみは人だけのものではないのかもしれない。石も長く辛い思いをしているのである。同時にそれは、作者の思いでもあるのだが、作者のような優しい手を持ちたいものだ。



◆ 告知板

令和四年度新入進会員
河瀬 洋司(長門)

現代俳句協会四十年永年会員

河村 正浩(下松)

現代俳句協会三十年永年会員

田中 賢治(山口)

松原 君代(光)

山戸みえ子 御逝去。哀悼

◇ あとがき

「向かい干支」というのをご存知でしょうか。十二支を円に並べたときに自分の干支の向かい側、対角線にくる干支をさします(子⇓午、丑⇓未、寅⇓申、卯⇓酉、辰⇓戌、巳⇓亥)。

向かい干支は、自分にはないパワーを与えてくれる「守り干支」と呼ばれています。江戸時代より、この向かい干支を大切にすると幸福が訪れるといわれています。

作家の泉鏡花が、向かい干支であるうさぎグッズのコレクターだったのは有名な話です。酉年の鏡花は、幼い頃母親からもらった小さな水晶のうさぎを大切にし、うさぎの品物を集め続けました。皆さんもご自身の向かい干支を集めてみると興味深いかもしれませんね。

令和五年、卯の年が皆様にとりまして幸多き年となりますようにお祈りいたします。

(平川扶久美)

☆ 事務局 郵便番号 七五一〇八六三

住 所 下関市伊倉本町十四―三

平川扶久美 方

TEL&FAX 〇八三―二五四―三七三二

☆ 経理部 郵便番号 七四四―〇二七一

住 所 下松市米川下谷二一九

橘 美泉 方

TEL 〇八三三―五三―〇〇二五

振込口座番号

〇一三九〇―一九―〇八九〇三八

現代俳句やまぐち第八十七号

令和五年一月二〇日発行

発行所・山口県現代俳句協会事務局

発行人・久 行 保 徳

編集人・平 川 扶久美

印刷所・株式会社ふじたプリント社

周南市久米三九一八